

實に往古から契丹・女眞族の當時に至るまで、北方民族の漢地侵入は常に繰返されたことで、一々枚舉し難き頻出の事件である。その多くは凶暴なる掠奪行爲として風過したのであるが、遼・金に至つては漢地を奪つてこれに君臨し、判然たる民族意識の下に漢族を統治し壓迫した。しかしながらその占有した地域はたゞ漢地の一部分であつて、各々河を越え、淮を過ぐるには至らず、その統治下に服するを欲せざる漢族は、江南に脱出すれば同族の治下に住み、依然として彼等の勢力に對立拮抗することを得たのである。

しかるに宋の滅亡後は支那の全土は初めて悉く蒙古の占有に歸し、漢族は支那の地を去らぬ限り、一人として蒙古族に對抗し、その支配の外に立つことを得ざる有様になつたのであつて、この改革が啻に支那史上における大事件なるのみならず、實に東方における民族勢力消長史上に初めて出現した重大なる現象と見做されなければならぬ所以である。

さてあらゆる文化現象は政治上の事情を背景として發生し變轉すべきものであること更めて説くまでもない。しからば既に政治上において、漢民族が歴史あつて以來初めて全く主權を喪失し、全支那の地が砂漠の民の支配に歸するといふやうな大變局を現出した時代に、支那における文化現象の上に著しき轉變を生じたであらうことは容易に想像し得るところであらう。